

吉備勉強会 2023 開催

吉備学習システム販売(株) 主催

10月29日(日)、岡山の行楽ホテルにおいて吉備学習システム販売株式会社(川上真司代表取締役、岡山県岡山市)主催「吉備勉強会2023」が開催された。

「同社の学習システムメビウスZERO」の説明や新たなサービスのお知らせのあと、「今後求められる民間教育」をテーマとした株式会社市進ホールディングス代表取締役会長 下屋俊裕氏による基調講演、メビウスZEROを上手に活用している個別指導レベルアップ 六本木 椋氏、三重進学ゼミ 梗結が丘校 塾長 松田亮由氏が自塾の取り組みを紹介した。

第1部 テキスト、Web教材と連携したバックメビウスのサポートなど

冒頭、川上真二代表が挨拶。

「今日は8年ぶりの勉強会となりませんが、岡山まで大勢の方にお越しいただき、本当に感謝しかありません。第1部ではメビウスZEROの進化についてお伝えできればと思います。第2部の事例紹介では、本当にびっくりするようない塾に登場していただきますので、ぜひとも参考になさってください」

学習システム・メビウスZEROの説明と提案を行ったのは、近藤巨部長。



吉備学習システム販売(株) 川上真司 代表取締役

人ひとりで異なる「理解していない部分＝弱点」を明確にし、その弱点のみを克服していくピンポイント学習法。すでに理解している問題を何度も復習する無駄を省き、集中力が続く短時間のうちに弱点



吉備学習システム販売(株) 近藤巨部長

のみを効率的に学習するというもの。現在のメビウスZEROは初代から数えて6世代目となるモデルで、小学・中学教科にオプションの高校教科を加えた40万台超を収録している。

プリント作成で選べる問題には「基本」「標準」「応用」「発展」4レベルを設けているので、個々の生徒の学力レベルなどに合わせて演習プリントを作成できる。さらに問題の選び方として「単元指定」「ページ指定」という機能がある。

「単元指定」は、各単元内容を大分類・中分類・小分類・細分類と分けてあり、使いたい問題をピンポイントで選択できるので、授業後の確認テストなどが簡単に作成できる。「ページ指定」は、教科書の種類・学年を選び指定したページ範囲に沿った問題を手軽に選ぶことができるので、定期テスト対策に最適だ。

そして、「バック問題から選択」というのもある。バックとは、予め問題を選んでパッケージ化したものだ。イメージとしては、テストの作り置きができるというもの。塾で使用しているテキストや映像教材に合わせたバックで独自カリキュラムを作成できるのも大きな魅力だ。

独自にバックを作る塾も多いが、特に最近は忙しくてなかなかバックを作る時間がないという塾も多く、そのニーズに応えるべく、2024年春から開始を計画している「プラスワンサポート」の1つとして、「バックデータの提供」を低価格で行う予定。塾で使っているテキストやWeb教材に連動した学習ができることがメビウスZEROの最大の強みなので、バック機能を活かして生産性を上げてほしいという。テキスト、通常用のプリント、講習用のプリント、受験対策特訓コース、確認テスト、演習問題などのバックを作成していく計画だ。

また、もう1つの「プラスワンサポート」は、教室運営と研修サポートだ。オンライン勉強会などを定期的に開催することも計画している。

第2部 基調講演

(株)市進ホールディングス代表取締役会長 下屋俊裕氏 「今後求められる民間教育」

第2部の基調講演では、(株)市進ホールディングス代表取締役会長 下屋俊裕氏が「今後求められる民間教育」をテーマに講演をした。

下屋氏が最初に提示したのは人口動態。2022年度の子どもの出生数を見ると、年間で初の80万人割れとなり、想定より約10年早く少子化が進行。8月30日の日経新聞朝刊によると、今年1～6月の出生数が37万人で、年間では76万2000人の予測。従来の予想では2043年に70万人割れとなるが、2026年に70万人割れになるという悲観的予測もあるという。



(株)市進ホールディングス 下屋俊裕 代表取締役会長

地方の過疎化は以前から大きな問題となっているが、日本総合研究所 藤原匠氏の研究によると、特にキャリア志向の強い女性は東京に出て、地元に戻って来ないという。今後ますます共働きが増え、女性のキャリア志向が高まるであろうことを考えると、収入、キャリア、周囲の理解などの女性が働きやすい環境をつくり、自治体の支援、インフラ整備などの子育てしやすい環境をつくる必要がある。従来の男性目線ではなく、女性目線で見るときに、学習塾が存続できるヒントがあるのではないかと下屋氏は述べる。

これだけ少子化が進み働き手が少なくなってくると、当然のことながら講師を募集してもなかなか採用できない。が、こういうときこそ塾の原点に帰るべきだと下屋氏は述べる。

「なぜ子どもたちが塾に来るのかというと、それはもう単純で、学校の成績を少しでも上げたいからで

す。先生方にぜひともお願いしたいのは、生徒全員の名前と成績は把握してほしいということ。期末テストで数学の点数が10点も伸びたんだってな、すごいな。などという声かけをするだけでも、生徒は定着します。今、そのことが忘れられているわけではないのでしようが、なかなか子どもたちのニーズが掴めなくなっているのではないかと危惧しております」

日本語をきちんと読めて書けるようになることも重要だと強調する。

「塾の形態が多様化するのには当然ですが、まずはきちんと日本語が読めて、書いて文章にできることが大切です。それは英語力の向上にもつながります。語学の専門家の間では、母語以上に異国語の力が伸びることはない、というのは常識です」

紙に書いて学習することも必要だ。

「私どものグループ塾の市進でも茨進でも個太郎塾でも、手元に紙を置いて、演習問題などの解答は必ず鉛筆で書くように指導しています。ペンタッチではありません。見るだけの目の記憶、聴くだけの耳の記憶だけではわかつたつもりになるだけです。要するに、手で覚えないと覚



えられないということです。学習システム・メビウスZEROは、きちんと印刷して紙として出してくれませし、バック機能を使って塾のテキストや私どものウイングネットにもピンポイントで適した問題を出してくれるので、本当に役に立っております」

講師が採用しづらい状況では、それを前提にオンライン学習も必要不可欠だと述べる下屋氏。

「複数の教室を展開している塾では、スマーティ化を図りながら、人口動態をよく見て、子どもが増えている地域の教室展開もいいのではないかと思います」

